

# 魔羅神様の男神子



原案：G i o様  
小説化：濠門長恭

## 目次

1. 男女判定 .....	- 3 -
2. 男根封印 .....	- 18 -
3. 神前奉納 .....	- 55 -
4. 托鉢修行 .....	- 76 -
5. 男精修行 .....	- 88 -
6. 恥獄巡行 .....	- 108 -
7. 神事失敗 .....	- 128 -
8. 禁身相姦 .....	- 136 -
後書 .....	- 157 -

この小説は、股姦淫鞭縄などエロ&SMジャンルに必須の漢字を除いて、おおむね漢検4級レベルで書かれています。但し、表題と章題はこの限りではありません。

主人公が習っていない漢字については、誤用の当て字が使われる場合もあります。

「機嫌→気元」、「括約筋→活約筋な」ど。

音と様態が似ているので、主人公も分かっています、間違った表記をする場合もあります。

「勃起→起っき」など。

その他、アナルを名詞として使っているな

ど、表記が不自然な部分は主人公の学習レベルに応じたものです。校訂ミスではありません（多分）。

## 1. 男女判定

進学して初めての夏休みに、初めてのひとり旅。電車と電車とバスとバスを乗り継いで。朝の六時に家を出て、終点の夕明村<sup>ゆうあけ</sup>バス停に着いたときには、十二時を過ぎていた。平日は一日に五便だけど学校が休みのときは朝昼夕に一便ずつしかないバスは、ただ一人の乗客であるぼくを降ろした後は、のんびりと時刻待ち。

とりあえず、着いたよって電話。バス停からさらに一時間も歩く村は、大手のキャリアでも圏外だから、これが最後の連絡。ま、お祖母<sup>おばあ</sup>ちゃんちで固定電話を借りればいいだけの話だけどね。

「きみ、キヨシ君でしょ」

待合所から出てきた女の子に声をかけられて、ちょっとびっくりした。というか、いぶかしんだ。

だって、ぼくの名前は荘田清美。ふつうキヨミって読むし、戸席もそうなってる。だいいち、戸席上の性別は女だし、今だってサマーワンピースを着てる。どこから見ても女の

子だぞ。ショートボブにしてるけど、胸のふくらみもないけど、それでもボーイッシュの範中だぞ。

ぼくが男の子で、本当はキヨシだって知ってるのは、ぼくの両親だけなのに。なんてのは、とりあえず後回し。

「はい……ソウダキヨシですけど？」

まだ声変わりしてないから、声でも男女の区別はつかないと思う。

「あたしはイチノミヤマソノ。迎えに来ただけど……」

マソノと名乗った、お祖母ちゃんと同じ名字の女の子——じゃないね。ぼくより頭ひとつばかり背が高い。そりゃまあ、ぼくはクラスの女子と比べても小柄なほうだけど。それを割り引いても、ぼくより二つ三つは年上かな。腰に届きそうなロングヘアをさらりと流して、Tシャツにスリムなジーンズが、かえって女っぽさを強調してる。

マソノちゃん——じゃなくてマソノさんが、停まっているバスを指差した。

「あれに乗って、家へ帰りなさい。それが、君のためにも村のためにも、良いことなんだから」

「ぼくは……この村で生まれた男の子として、

ちゃんと神事を済ませる義務があるんです」  
と、ママに言われてる。パパは、なぜか無  
言でそっぽを向いてたけど。

マソノさんは、ふっと――ため息かな。  
「後かいしても知らないよ。村まで案内して  
あげる」

言うなり、きびすを返して、バス停から続  
く山道を登り始めた。

なんなんだよ――と、「？」を三つくらい頭  
の中に浮かべながら、後を追いかける。

マソノさんはずんずん歩き続ける。山道を  
歩き慣れてる。ぼくは後を追いかけるのが、  
やっと。ぼくは荷物を持ってるし、マソノさ  
んは手ぶらというのものもあるけれど。でも、ぼ  
くも一応は男子。女子に荷物を持ってもらう  
なんて、出来るもんか。

十五分（正確にじゃなくて、一時間の半分  
の半分くらいって意味）も歩くと、息が切れ  
てくる。のに、マソノさんは余ゆうしゃくし  
ゃくしゃくにさわる。

だけど、後ろから見てると、本当に女の子  
だなあって実感する。歩くときに腰から動き  
始めて、真ん丸なヒップが上下にくねって、  
ひざから下はその動きを追いかけてる。いく  
らぼくが女の子の格好をして、学校でも女の

子として通用してても、本物にはかなわないや。

マソノさんは、歩きながらひっきりなしにおしゃべりしてる。自分の名前は漢字だと真実に御苑のエンだとか。大昔は村じゅうが藤原とか立花って名字ばかりだったけど、明治時代に戸席制度が整備されたときに、家の格に従って一宮、二宮、三宮、良宮（シは縁起が悪い）、後宮、陸宮ってふうに改名したとか。歩きながら後ろを振り返ったりもせずだから、独り言ぽい。ぼくには、相づちを打つ余ゆうもなかったよ。

そうか。ぼくが訪ねて行く先はママの実家で、一宮だけど。真苑さんに改めて言われるまでは、ひょっとして親せきかなとは思ってなかった。なんてことを考えられたくらいだから、真苑さんは、ぼくの歩く速度には合わせてくれてたんだろうな。それは、次の言葉ではっきりした。

「はあ、やっと着いた。五十分の道のりが一時間以上かかったけどね」

足腰の弱い都会者ってバカにしてるんじゃないなくて、出来の悪い年下の子をあわれむみたいな口調だった。

四歳のときに村を出たぼくには、初めて訪

れた地も同然。人口は五百人足らずだけど、都会ならてい宅規模の家がずらっと並んでるから、けっこう大規模に見える。ひとつの箱の中に何十世帯も詰め込まれてるマンションとは大違いだ。

汗をふく暇もなく、百年前から建ってたと言われても納得できる、古びた大きな御屋敷へ案内されて。ろう下をずずずずずいと奥へ進んだ座敷に通されて。すずしきどころかうすら寒さを感じた。

そこには、床の間を背にして、身体は小さいけれど、すごい威厳のありそうな大ばば様みたいなおばあさん（ぼくの祖母の民江さんかな）と、ぼくの年齢の二倍も三倍もありそうな、でも神社で見かける巫女さんの衣装を身に付けた女性が三人と。壁に沿って七人の男性がコの字形に並んで――ぼくを見つめていた。

気圧されて、座敷に入ってすぐの所で、ぺたんと正座。

「おまえは、本当に初美の息子なのか？」

大ばば様から、御下問って感じ。

「はい。こんな格好をしていますけど、男です」

「なにゆえに女装をしておるのじゃ」



巫女さんの一人。この人だけは、小さな金色のかんむりを頭に載せている。

「こうしていないと、この土地の神様にのろわれるって、母から聞かされています」

迷信とかいう言葉を口に出せるようなふん囲気じゃなかった。

「ふん。どんな<sup>なり</sup>形をしようが、のろいからは逃れられぬぞ。しかし、おまえが真に男であると確かめた者は、この村に居らぬ」

「見れば見るほど<sup>おなご</sup>女子じゃのう。間違いがあつてはいかん。服を脱いでみなさい」

大ばば様をはさんでかんむり巫女の反対側に座っている巫女さんが、さらりと言った。

村では、何を言われても何をされても、逆らつてはいけないと――ママから厳しく言われてる。十日間だけの我慢。それでのろいから解放されるんだからと。

ぼくとしては。男の娘でいることが自然になつてる。そりゃまあ、将来もこれじゃあいやだし。性別適合手術を受けて女性になりたいかということ、それもいやだ。むくつけき男に可愛がられるなんて、ぞっとする。きゃしゃで柔らかくて良いにおいのする女の子を、ぼくが可愛がりたいんだ。

というのは、ずううっと横へ押しつけて。

ぼくは立ち上がって、素直に服を脱いだ。下着も(女の子らしく、両手をクロスさせて)脱いで、ショーツ一枚。ここまでは、身体測定でも体育の着替えでも慣れてる。

「何をしている。パンツも脱ぎなさい」

大ばば様にしかられて、心臓が三十センチは跳び上がった。修学旅行のときだって、ほんとにドキドキしたんだから。全身が火照るのを感じながら、ショーツを脱いで。恥ずかしいので、両手で胸と股間を隠した——ら、やっぱりしかられた。

「手を下ろすのじゃ」

見て驚くだろうな——と、恥ずかしさの中にも、やけっぱちな自慢気分を交えて、手を下ろした。

おおっと、座がどよめいた。胸にふくらみが無いのは当然だけど。男の付属品が股間に付いてないのには、驚いたろうね。まるきりの一本筋だもの。まるきりのツルペタだもの。

「おまえ……まさか、<sup>おなご</sup>女子なのか？」

「隠してるんです。チン、だんせ……ペニスも見せないとダメですか？」

ものすごく恥ずかしいのと、ちょっぴり得意なのとが混ざり合った複雑な気分。

「インターネットで見たことがあるぞ。それ、

タックとかいうやつだな」

七人の中でいちばん若いぽい(といっても、三十過ぎの小父さんだ)男性が、得意そうに言った。そして、大ばば様に向かって言い訳めいて。

「もちろん、サーバー経由のVPNでアドミン権限の情報収集の一環としてですよ」

自分でも理解出来てないIT用語を並べてるぽいな。

「隠しておるのなら、出さない」

「はい」

畳の上に正座して。バッグのポケットから、瞬間接着剤の「はがし液」と小筆を取り出した。後、ティッシュ。

ひざを開いて、股間の一本筋に「はがし液」をぬって染み込ませる。毎朝タックをして女の子になって、家へ帰ったら男の子にもどる。三年前からはひとりで出来るようになってる。

瞬間接着剤がふやけるまでの数分。液が垂れないように上体を反らせて畳に両手を突いて、股を開きっ放し。初対面のオトナに三方から囲まれて、とんでもないことをしてるなって……だんだん恥ずかしさがつってくる。正気を取りもどしたっていうほうが当たってるな。

神事って、具体的に何をするのか、ママも教えてくれなかった。実は知らないんじゃないかと疑ってるけど。そして、見知らぬ場所で見知らぬオトナたちに囲まれて。しかも、恥ずかしいことを要求されて。正気を保てるはずが無いだろ。

正気を取りもどしたといっても、三十パーセントくらいかな。だから、恥ずかしい作業を続けられたんだと思う。

左右のタマぶくろをはり合わせて縦筋になってる部分をそっと引きはがすと、チンチンがぽろっと出てくる。

「おおおっ」

「まあ……」

「ふうむ？」

そりゃ驚くよね。「女の子」の中から「男の子」が現われるんだから。

大ばば様なんか、顔をしかめてる。

「なんと、まあ。フウジコかと思うたぞ」

「ありゃあ、ただの伝説でしょうに」

「しゃけど、イミコのそもそもの始まりじゃけん、オフクロ様がそがい思われるのも無理はなかろうよ」

部外者にはさっぱり意味不明の言葉が行き交ってから、ようやくぼくに話がもどってき

た。

「妙にしなびた金玉だな？」

タマタマはふくろから押し上げて、下腹部にしまっている。言葉で説明するのは面倒だし恥ずかしいから。畳の上ではクッションになるので。ろう下へ出て、ケンケン跳び。によむんって感じで、玉が片方ずつふくろの中に下りてくる。

「ええと……こんなです」

まさか「おそまつ様」なんてあいさつもおかしいし、口の中でもぐもぐつぶやいてから、元の位置に座った。もう必要が無いから、ひざをぴったりそろえて正座。でも、みんなきちんと服を着てるのに、ぼくだけ裸。すごく居心地が悪い。サオとタマタマを太ももの間にはさんでるってのも違和感だけど。

「しかし、実になんというか……短小包径もいいところですよわね」

三人の中で圧倒的に若い（ぼくとひと回り違うくらいかな）巫女さんが、口に手を当てて笑った。

女の子として通してるから、クラスメイトのチンチンは見たことがない。ネットで見かけるサイズはオトナ基準だから、それに比べたらずっと小さいけど、起っきしてるときに

四センチ以上あればセックスに問題は無いそう  
だ。ぼくは縮んでるときでもそれくらいは  
あるぞ。包径だって仮性だから、多数派だぞ。

でも……

「確かに。年齢を割り引いても小さいな」

「おれがこいつくらいのときには、倍はあつ  
たぞ」

「こいつに合うサイズなんて、あつたっけ」

そんなふうに言われると、泣きたくなって  
くる。

「大きさは問題ではないわえ」

大ばば様はぼくの味方——じゃなかった。

「かんじんなのは働きじゃ。キヨシよ、精通  
はしておろうの？」

むぐ……学校ではほとんど教えてくれなく  
ても、ネットで調べれば、精通でも初潮でも  
オナニーでもセックスでもニンシンでも中絶  
でも、何だって分かる。そしてぼくは……何  
ひとつ経験が無い！

初潮とかニンシンじゃなくて、精通の話だ  
よ。チンチンを指でつまんでしごとと（特に  
カリクビのところが）すごく気持ち良くなっ  
て、ビクビクッと腰がけいれんするんだけど、  
それだけ。空砲ってやつ？ それでもけん者  
タイムの自己けん悪に突入するんだから、な

んだか損をした気分になる。

こういうときは、黙っているのが返事になってしまう。

「ふうん。まだ毛も生えてないし、声も子供だし……でも、本当に出ないのかな？」

若い巫女さんが、ふわりと立ち上がった——  
一次の瞬間には、赤いはかまがぼくに向かって押し寄せて来て。

「あっ……?!」

ひざの間に手を突っ込まれて、チンチンを握られてた。

「やめてください」

カマトトじゃないよ。知らないオトナに囲まれて裸っただけで、恥ずかしくて頭がでんぐり返ってるのに、いちばん恥ずかしいところを、それも若い女の人に握られて。

なんとか押し返そうと、じたばたあがいたら。

「おとなしくしろ。おまえのケガレをはらえるかどうかのせとぎわだぞ」

男の人に、羽交いじめにされた。ものすごい力。身をもがくことすら出来ない。

恥ずかしいことをされてるけど、危害を加えられてるんじゃない。そんなふうに自分を納得させて、抵抗をやめた。

巫女さんが、チンチンをもにゆもにゆとしごく。目いっぱい縮かんでたのが、たちまち起っさる。ものすごく気持ち良い。自分でするのが木綿豆腐なら、これは絹ごし。よりも柔らかくて甘い——プリンだ。

切ない思いが腰に込み上げてきて。

「ああっ……！」

自分でするときには声なんか出ないのに。ぴくぴくじゃなくて、がくがくと腰が震えた。

「あら、ま。本当に煙だけね。でも、先走りは出てるから、明日は無理でも一週間後くらいなら、どうかしら」

「では、お清めはそれからじゃな」

「それまでに奉納と修験は済ませておきましょう」

さっぱり意味が分からないけど、ぼくに関する事柄が、ぼくを抜きにして決められていく。

「あの……もう、放してください。それと、どういうことなのか、神事ってしか聞かされてないんですけど、具体的に何をどうするのかも教えてください。それから……もう、服を着ていいですか？」

「ダメじゃ。おまえは、お清めが済むまでは裸で暮らすのじゃ」



「……………」

とんでもないことを言われて、しばらくは頭がエンストしてた。

「そんなのって、人権無視です！」

自分の思いをうまく表現できなくて、学校で習った言葉をそのまま使ったんだけど。

「この村で生まれた男に、人権なぞ無いわえ。昔じゃったら、赤子のときに間引かれているところぞ。命があるだけ幸せに思え」

大ばば様の声は、ぞっとするほど冷たかった。この人、絶対にぼくの祖母じゃない。

「真苑。チンコジを持って来なさい」

ぼくを座敷に案内した後はどこかへ引っ込んでいた真苑さんが、大きな四角いお盆を持って現われた。

これから何が始まるんだろうという疑問は、すぐに答を与えられた。ぼくは座敷の真ん中に引き出されて、あお向けに押し倒されて、男の人たちに手足を押さえつけられた。

お盆がぼくの顔のすぐ横に置かれた。厚さ一センチ以上の鉄板から切り出したような輪っかとか、それを半割にしたのとか、C形で薄い（といっても五ミリはある）リングは内側がデコボコになってる。直径一センチそこから四センチ以上のまで、何個も並べら

れている。

「これは小さすぎるわね」

「昔は、赤ん坊のころから着けさせたっていうから……ああ、これくらいかしら」

頭にかんむりを載せてない（平の？）巫女さんが二人で相談して、ついでにぼくのチンチンを握ったりしながら、円を半割にしたような鉄の輪っかをお盆から選び出した。一人がチンチンを引っ張りながら、もう一人が輪っかを根元にあてがった。

「あっ……何を？」

ばしん。ぼくの横に座りこんでいた男の人にビンタを張られた。

「黙っておれ。何をどうするかは、順番に教えてやる」

こんなことをされるって、ママは承知していたんだろうか。だから、何をされても逆らってはいけないなんてしつこく言ってたんだろうか。

抵抗をやめたぼくのチンチンに、鉄の輪っかがはめられて、他にも変てこな器具を取りつけられた。

## 2. 男根封印

チンチンを引きのばされて、半割の輪っかをサオとタマタマの根元で左右からはめられて、細長い工具で半割をひとつに閉めつけられて、抜けなくされた。

「少しゆるいね」

同じ工具で、輪っかの途中に植え込まれているネジを回されると……

「痛い……」

ネジの先がチンチンに突き刺さってくる。

「こんなものね」

ぼくの訴えには耳も貸さず、輪っかをひねる。ネジの先が食い込んでから輪っかは回らずに、鋭い痛みが跳ね上がる。

同じような輪っかが、もうひとつ。これはタマタマだけをうんと引きのばされて、前の輪っかの下に付けられた。

さらに。チンチンの先っぽから全周の輪っかを通された。そして最後に、C形のやつ。輪っかの切れ目近くに明いている小さな穴にラジオペンチみたいのを差し込んで、ラジオペンチとは逆に広げてチンチンに通して、チ

ンチンの皮をむき下げて亀頭を露出させて、カリクビのところにはめられた。

鉄の冷たい感触に刺激されて大きくなりかけると……

「痛い……これ、外してください。なんだって、こんなことをするんですか？」

「お清めの準備じゃ。修行のとき以外は、着けっぱなしじゃ」

とんでもない答えが返ってきた。

着けっぱなしどころか——チンチンを折り曲げられて、サオにはめられてる輪っかとタマタマを下に引っ張っている輪っかとか、カチンとつながれた。チンチンもタマタマも、ひとまとめに丸められた形だ。

「修行は明日からじゃ。今日は村をひととお案内してやる。後は、ゆっくりと休め」

休むといっても裸で、この変てこな輪っかを着けたままなんだろうな——なんて、先のことを心配するどころじゃなかった。

立ち上がると——鉄の輪っかの重みで、ずうんとタマタマが引っ張られて、痛くはないけど気色悪い。

三つの輪っかは、サオとタマタマの根元にはめられてるやつが、いちばん大きい。そしてこいつには、半割のどちらにも鉄のリング

が取りつけられていて——そこに長い縄が結び付けられた。二本の縄で引っ張られる。

座敷へ通されたろう下を逆にたどって、玄関へ。裸のまま、外へ引き出される。そう判断して、ぼくは足を止めた。

「もう、やめてください。なんだって、こんなことをされなくちゃならないんですか?!」

「キヨシが男の子だからじゃよ」

後ろについてきていた大ばば様が、冷たい声で答えた。

「あなたは……もしかして、ぼくのお祖母さんですか。孫をこんな目にあわせるなんて、ひどいじゃないですか」

大ばば様はそれに答えず、犬を追い払うように手を振った。

ぐいっと二本の縄が引かれて、痛みをやわらげるには前へ歩くしかない。

「いやだ。やめてください」

抗議には耳も貸してもらえず、とうとう外へ引きずり出された。

「えっ……?!」

外には女の子ばかりが十人くらいも集まっていた。縮かんでいたチンチンが、お腹の中にめり込むくらいにいつそう小さくなった。ので、サオに食い込んでいたネジの痛みが無

くなった。

「同世代の者に案内してもろうたほうが、気安かろう」

ぼくより二つ三つ年上（ということは真苑さんと同じくらい）の子が二人、二本の縄尻を引っ張る。

「やめろ。こんなのって……おかしいよ！」

他に適当な言葉を思いつかないくらいに、異常な状況だ。人権とかイジメとか、そんなありふれた言葉じゃ追いつかない。

ぼくは縄をつかんで、逆に女の子を引っ張った。

「何するのよ。逆らう気なの？！」

「この子、まだ自分の立場が分かってないのよ。それを教えてあげるのも、あなたたちの役目だから」

真苑さんが、取りなしてくれたのか、けしかけたのか——はっきりしない。

「でも……いちいち抵抗されちゃ面倒です。なんたって、乱暴な男の子なんだもの」

乱暴なのは、そっちだろ。

「そうじゃの。抵抗できないように縛ってしまいなさい」

この大ばば様、すぐにとんでもないことを言う。そして、七人の男たちときたら、まる

で召使みたいに言いなり。

新しい縄が持ち出されて。寄ってたかって——腕をねじ上げて、二重にした縄で手首を縛り、余った縄を左右に分けて二の腕も縛った。さらに首の後ろでクロスさせて肩越しに前へまわして、胸にまで縄を巻いた。まるきり、時代劇の罪人だ。

「これなら、どれだけ暴れても取り押さえられるじゃろう」

「うん。それじゃ、出発進行！」

電車ごっこじゃないんだよ。

抵抗してもムダ。どんどんひどいことをされる。それを思い知らされたので、おとなしく引っ張られて歩く。ていうか、縄を引っ張られないように、みずから進んで歩いた。チンチンを引っ張られると痛いし、それ以上にくやしさと恥ずかしさで居たたまれない。オトナの男に引っ張られるよりも、同年代の女の子に引っ張られるほうが何十倍もいやだ。

「さっきの御屋敷が総本家の一宮様で、両隣が二宮家。正面も、そうだよ。三宮家から下は、あちこちに散らばってる」

真苑さんがぼくと並んで歩きながら説明してくれる。

「そんなの、どうでも良くないですか。こい

つ、どの家にも入れてやらないんだから」

ぼくを引っ張ってる二人のうち、右側の子が変なことを言った。

「何から説明したら分かってくれるか、手探りってところだから」

「そんなの、身体に教えてやれば済むことだって。後宮のタカシさんも言ってたじゃないですか」

「うーん。やっぱり、納得ずくでいきたいんだけどねえ。百年も二百年も昔じゃあるまいし」

当事者のぼくを置いてけぼりにして、年かきの女の子たちが、かしましいってやつ。

大きな家が多いといっても、人口五百にも満たない村。あつという間に村を奥へ突き抜けて、目の前には大きな林。の前に川が流れてる。橋はさすがにコンクリート製だけど、らんかんが無くて、渡板の親分みたいな感じ。

その橋を渡らず、たもとの川べりへ引っ張られた。チンチンの輪っかにつながれてる二本の縄のうち一本がほどかれて、もう一本と結ばれた。それまで黙ってついて来てた年少の女の子たちが、レンガくらいの石を幾つも拾って――縛られてる二の腕と縄の間に押し込んでく。



すごくいやな予感がする。

「神域には、ケガレは立ち入れないの。きみはお清めしないとイケない。だから、入水じゅすいして」

今、真苑さんはジュスイっていったぞ。ニュースイじゃなくて。

年長の子がふたり、長い縄を持って橋に上がった。縄を引いて、ぼくを川へ引きずり込もうとする。

まさか深くはないよね——川へ足を踏み入れるしかなかった。

五人くらいが裸足になってスカートのを太ももの上で結んで、川へ入ってきて、ぼくを追い立てる。

ひざ頭が水面に出るくらいの深さで三分の一ほど進んだ所で、踏み出した足が宙に浮いた。急に深くなってる。川底が見えない。足を引っ込めようとしたら。

「せえのお！」

どんっと背中を押された。

「わあっ……！」

ざばっと、頭まで水の中に沈んだ——のは、バランスを失って倒れたから。そんなに深くはない。立ち上がろうとしたけど、立てない。上体を縛る縄の間に石を押し込まれてるので、

水の中でも身体が重たい。川底のどろで足がすべる。

無理に頭を上げると、いっそうバランスをくずして身体が深く沈む。

落ち着け落ち着け落ち着け。きっちり息を止めて、身体をのぼし……たら、逆立ちしそうになるので、水中で丸まって。

がぼぼっとあわを吹いた。水中じゃなかったら悲鳴を上げてるところだ。

タマタマに、分厚くて鋭い（としか形容できない）激痛が走った。鉄の輪っかにつながれた縄が引っ張られてる。輪っかが抜けようとしてタマタマにつっかえてるんだ。

ざばあっと水面に浮かんだのは、下半身だけ。腹筋を使って頭を持ち上げて、やっと息が出来たのは数秒だけ。

「重たいよお」

そんな声といっしょに、また水中へ逆もどり。あやうく水を吸い込むところだった。

また、すぐにタマタマを引っ張られた。痛いのを我慢して、水中で身体を起こすように努めた。自分で腰を引いてタマタマを痛めつけてるようなものだ。

今度は、なんとか川の中で立てた。水位は、ちょうど乳首のあたり。

「まだ、お清めが足りないんじゃない？」

「けろっとしてるものね」

女の子たちが、橋の上でそんなことを言い合って。橋の先へ進んでから、また縄を引っ張った。

「せえのお！」

予想はしてたから、ぼくは前へ進んだ——のだけど。タマタマを斜め上に引っ張られてるんだぞ。胸の高さに重石を付けられてるんだぞ。あっさりバランスをくずして、あお向けにひっくり返った。

痛いのを我慢して、そのまま引っ張られると決めた。立っても、また同じことをされるだけだ。向こう岸まで着けば、それで終わるさ。

なんて考えは甘かった。縄がゆるんだなと思ったら、反対方向へ引っ張られ始めた。お清めが足りるまで続けるつもりだ。「すすぎ洗い」なんて言葉を——連想してる場合じゃないよ。このままだとおぼれてしまう。

上体を起こして腰を沈め、川底に足を踏ん張って。タマタマで身体を引き起こしてもらった。股間の激痛に耐えながら息を吸った。

女の子たちも、ぼくをいじめる目的は「お

清め」だから。おぼれ死なすつもりはないに決まってる。ぼくが息を整えるまで、しばらくの間は縄をゆるめてくれていた。

「おーい。もう一回、お清めをするよ。準備はいいかな？」

遊び（せん水かんごっこ？）でも始めるような軽いノリ。すごくむかつく。ぼくは大きく息を吸いこんで、自分から川に沈んでやった。

十秒くらいは何も起きなかったけど。女の子たちに、ぼくをおぼれ死なすつもりはなくても、いじめられっ子に主導権を握られるのはいやだったんだらう。不意に、これまでよりずっと強い力で縄を引っ張られた。チンチンごと根元から引っっこ抜かれるか、輪っかにタマタマをつぶされるか。ぼくは身体を丸めて縄を抱え込もうとしたけれど、そのせいで足が川底から離れて、水中で引き回される形になった。

背中や尻が川底にすれて、わきの下に突っ込まれてる重石が川底に引っかかって、それでも力任せに引っ張られて。身体じゅう、あちこちが痛い。そのうち、タマタマの激痛がいちだんと強くなって――気がついたら、反対側の川べり近くまで引き上げられてた。

「お清めは終わったよ。さっさと立ちなさいよ」

また何人かが川まで入ってきて。立つのを手伝ってくれるんじゃないかと、尻とかわき腹をけりつける。思い通りにされるもんかって、強情に身体を丸めたままにしてると。縄を持っていた年長の子たちも川べりまで来て。

「それじゃ仕方ないね。このまま引きずって行こうよ」

五六人が縄に取りついて。

「オーエス、オーエス！」

くそ。電車ごっこ、せん水かんごっこの次はつな引きか。

「やめてくれよ。立つから！」

石ころだらけの浅せを五十センチと引きずられないうちに、ぼくは降参した。

また、縄が二本にもどされて、林の中へ続く道を歩かされた。すぐに、小さな鳥居が細い道をまたいでいた。その向こうには社殿というよりもシメ縄を飾った掘立小屋が見えている。

「せっかくだから、ミソギもしてやろうよ」

年長のひとりが提案したのを、真苑さんがたしなめた。

「そういうのは、巫女様にお任せしたほうが

良いんじゃないかな。オトナから『やれ』と言われたことだけをしとけばいいんじゃないかしら」

「殺したり後に残る傷とかをつけなければ、何をしたって構わないって、二巫女様もおっしゃってたじゃない」

「そりゃまあ。真苑様が『やめろ』っておっしゃるなら、やめとくけど」

「指図なんかするつもりはないわよ。お祖母様は一巫女を復活させるつもりなんですもの」

さっぱり分からない会話だけど、真苑さんが本気でぼくをかばってくれてるんじゃないってニュアンスだけは伝わってきた。

「やっぱり、ミソギもしてやろうよ」

年長者の中でも、このポニテの子がいちばんのアネゴらしい。だれも反対はしなかった。というより、みんな大賛成って感じ。

ぼくは鳥居の下へ連れて行かれて。チンチンの輪っかにつけられてた縄で足首を縛られた。縄尻が鳥居の柱に巻き付けられて引っ張られ、両足を大きく開かされた。元から隠せてはいないんだけど、ますますチンチンを隠せなくなった。

「暴れないって約束するなら、こっちの縄はほどいてあげるけど？」

ポニテの子が、腕を縛っている縄を引っ張る。どうせ足を縛ったから、何もできないと思ってるんだろう。くやしいけど、その通りだ。

「最初から、暴れたりしてないでしょ。ほどこいてください」

ぼくはふだんから女の子っぽい言葉遣いをしてる。それが身に着いてる。でも今は、それが自分でもひ屈に感じる。

ポニテが指図して、他の子に縄をほどかせたんだけど。

「なにをやるんですか。約束が違う」

「あら。こっちの縄はほどこいてあげたわよ」

ぼくの腕を引っ張って、鳥居に巻き付けても余っていた縄に結びつけた。

鳥居の間に、大の字にハリツケにされた。チンチンが垂れてるから『太』の字ハリツケだ——なんて、ふざけてる場合じゃない。まあ、水中じゃないから、恥ずかしいだけで苦しくはない——なんてのも、認識が甘かった。

「マラガミ様、お借りします」

ポニテが掘っ立て小屋に向かってうやうやしくお辞儀をしてから。近くの木から長い枝を折り取った。他の子も真似をする。

枝から葉をむしり取って、それを振り回す。

ひゅんひゅんと空気を切る音を聞いて、ぼくはすごく恐ろしい予感というよりも確信を持った。高い所から下を見ると、股間がぞわあつとするよね。それと同じ感覚に襲われた。

年長の子がぼくの前後に二人ずつ並んだ。真苑さんは、ずっと離れたところから様子を見守っている。ジーンズの股間に手を当てているのは、おしっこを我慢してるのかななんてことは、どうでもいい。

「男は要らん、種が要る」

ポニテが、節をつけてじゅ文みたいな言葉を唱えた。

「男は要らん、種が要る」

他の子も唱和して。いっせいに木の枝を振り上げて……

ひゅんっ、パシン！

「痛いっ……！」

胸と腹と背中と尻を木の枝でたたかれた。

ひゅんっ、パシン！

ひゅっ、パチン！

びゅうん、バチイン！

力いっぱいたたいてる子もいるし、あまり痛くない子もいる。

だけど。痛い痛くないは、どっちにしても高が知れてる。全裸でハリツケにされて、女



の子に囲まれて、木の枝でたかかれるというか、鞭打たれてる。それが、いちばんの屈じょくだ。なんとか神様とかミソギとか、薄気味悪い。

それに、さっきの真苑さんとポニテとの会話から推理すると——これと似たような（多分、ずっとひどい）ことを、オトナたちからもされるんじゃないかと思う。

この村って、カルト教団なんだろうか。ぼくは、その生けにえにされてるんだろうか。ママは、カルト教団の信者なんだろうか。

だけど、ぼくはママを信じたい。恥ずかしいことや痛いことをされても、十日間だけ我慢すれば、無事に家へ帰してもらえる。

四人が三回ずつたたいて、それでおしまい——には、ならなかった。

「やっぱり、諸悪の権限をたたかないとダメよね」

四人が、ぼくの正面に並んだ。これまでの経緯から『諸悪の根源』とは何か、容易に推測できる。

「やめて……お願いだから、急所は許してください」

「いいわよ。一発ずつでかんべんしてあげる」  
ぼくはスがるような目つきで真苑さんを見

た。真苑さんはぼくを真っ直ぐに見詰めている。でも、目のフォーカスが合っていない感じだ。やっぱり、おしっこを我慢しているのかな。

「男は要らん、種が要る！」

かけ声とともに、ポニテが鞭を水平に振り回した。

ひゅうんっ、バチイン！

「あうっ……！」

音は大きかったけど、もん絶するほどの痛みじゃなかった。ここだけは、鉄の輪っかでガードされてる。

でも二番目の子は、ポニテよりも残こくだった。木の枝を地面にはわせて、アンダースローみたいに跳ね上げた。

しゅっ、ビチイン！

「きゃあああっ……！」

もろにタマタマをたたかれた。きゅうんとタマタマがつり上がってきて、鉄の輪っかにさえぎられて——こういうときに男の子がケンケンをする理由が、よく分かった。

三番目の子も、先の子にならって枝を下から跳ね上げたけど。

しゅっ、バチン！

目測を誤ったんだろう。枝の先端はアナル

を越えて尾底骨のあたりに当たった。痛かったけど、悲鳴を上げるほどじゃなかった。

四番目の子は、手加減をしてくれていた子だろう。斜め上から打った枝は、サオとタマタマをくびっている鉄の輪っかに当たったので、三番目よりも痛くなかった。

これで、本当にミソギという儀式(?)は終わった。

また、鉄の輪っかに縄をつながれて、手は縛られないままで、神社らしい掘立小屋の前まで引き立てられた。

うへえ——というのは、内心の声。神社というよりも、お地蔵さんを祭ってあるやつ。ホコラっていうんだっけ。あれを大きくしたような小屋だった。祭られているのも、お地蔵さんによく似た御神体——かな。チンチンの石像。チンチンのことは古い言葉でマラっていうから、マラ神様だ。その大きなマラ神様にはシメ縄が飾られていて、周囲には小さなマラ神様が何百と並べられている。

でも、本当にここは神聖な場所なんだろうか。小さなマラ神様の中には、リモコンボックスとコードが付いたバイブまで混じってる。

女の子たちがかしわ手を打って、神妙に頭を下げた。

ぼくも真似をしなくちゃいけないのかな。ええと。クリスチャンのおそう式で、信者でない人はどうするんだっけ。

まごついているうちに、女の子たちは参拝を済ませて、来た道を引き返し始めた。ぼくのチンチンを引っ張りながら。

鳥居を出たところで細い道へ曲がって、林の中へ分け入っていく。女の子たちは慣れた様子で、目の前をふさぐ木の枝とか背の高い雑草をすいすいとかき分けて進むけど。ぼくは慣れていない。しかも、はだを護ってくれる衣服を身に着けていない。川でおぼれかけたときに出来た打ち傷やすり傷の上に、無数の引っかき傷が重なっていく。だけじゃなく。小さな虫（足が無いやつも、たくさんあるやつも）が身体のあちこちにくっついて、気味が悪いしくすぐったいし痛いし。

途中で後ろを振り返ったけれど、真苑さんはついて来てなかった。他の子は長そでのシャツを着てるし、スカートの子もハイソックスだけど、彼女は半そでのTシャツだったから。あの服装はジャングル仕様じゃないってことだ。だけどぼくは、二の腕も太もももチンチンも露出してるんだぞ。チンチンだけは、手でかばっている。ウルシの葉がどんなのか

知らないけど、チンチンがかぶれるなんて悲惨もいいところだもの。

五分ほども歩く（引き回される）と、またシメ縄が張り巡らされた一画に行き着いた。

「ここから先はキンダンの土地だからね。男の立ち入りは禁止」

ああ、漢字で書くと禁男か。

「男がうっかり踏み込んでしまったら、ただちに追放される。もちろん、種付料も全額ぼっ収よ」

種付料というのが意味不明だけど、次から次へと初耳が続くので、せんさくしてるひまはない。

シメ縄を越えてさらに奥へ行くと、娘小屋というのがあるそうだ。ウブミコ（初心巫女？）がマラ神様に処女をささげる訓練をしたり、子供同士がセッサタクマする場所だという。もしも男が小屋に足を踏み入れるどころか、盗み見しようものなら。

「たとえオキヨになろうと男ミコになろうと、絶対にダメ。百年くらい前までは、殺された男だっていたそうだよ」

オキヨとか男ミコとか、意味不明だけど、それよりも——今はどうなのか、恐くて尋ねる気にもなれない。

「あの……」

なので、別のことを質問した。

「こういう場所って、他にもあるんですか？」

「そんな心配はしなくていいよ」

というのがポニテの返事だったけど。そんな仕来りは捨てられているとかいうんじゃないかと。

「どうせ、おまえはひとりで村をうろつくことなんか許されてないんだから」

常に監視付きで、こんなふうには引き回されるんだと解釈したんだけど。実際には、もっと厳しい人権無視の扱いをされるんだとは、まだ思っていなかった。

川まで引き返して。林の中で傷つき汚れた裸を洗いなさいという名目で、また川の中をおぼれかけながら引き回されて。村へ向かっていたとき。

背後からバイクの音が近づいて来た。

バイクはぼくを追い越して、女の子たちの横で停まった。乗っているのは警察官だった。ヘルメットをかぶって、警察署の白文字を描いたベスト。無線機とかピストル（らしいケース）とかを腰にごてごてと装備している。

助かったという安どと。村の人たちはどうなろうと知ったことじゃないけど、両親まで

逆待とかでタイホされるんじゃないだろうかという不安と。

どちらも、当たっていなかった。

「この子が、例のイミコだね」

なんだか、死なずに異世界へ転生したみたいな感覚に襲われた。こんな逆待が警察公認だなんて……異世界でないとしたら、どういう仕組みなんだろう。

「違います」

ぼくの後ろを歩いてた真苑さんが追いついてきて、警察官に説明する。

「イミコというのは、昔の悪しき習俗です。この子は、お清めが終わったら五体満足なままで村から去るのです」

「うん、そうだったね。だから、まあ……宗教行為への不介入で済ませている。くれぐれも事件にならないよう、気をつけてね」

「私が、ちゃんと後見しています」

そんな遣り取りがあって、警察官はとっとと逃げて行った。

ぼくは、ぼう然。これまでは——世界があって、その中の小さな真空地帯がこの村だと感じていたのに。真空地帯の外が、一瞬にして消え去ったような心細さに襲われていた。それにしても、真苑さんの言葉には安心より

も不安ばかりがかき立てられる。昔の悪しき習俗だと、五体満足ではなくなってたことなんだろうか。現代だって……おぼれさせられたり鞭打たれたり。これが、その「お清め」とか以前の状況なんだよ！

それから。村へもどって。狭い村の中をあちこち引き回されて。村の人たちから、悪意を感じてしまうくらいに冷たい視線を浴びせられてるうちに。またひとつ、とんでもなさそうなことに気づいた。

村の住人は、圧倒的に女性が多い。特に、男の子の姿は一人も見なかった。昔だったら間引かれていたという、大ばば様の声を思い出して。今は、どうなんだろう。ぼくが、その実例かなと――背筋が総毛立つような恐怖を感じた。

けれど、そんなちゅう象的な恐怖は、現実の過激さに圧倒されてしまった。

一宮家の御屋敷に連れもどされて。今度は裏木戸から中へ入った。大ばば様と金のかんむりをかぶった二巫女様と、七人の男の内のひとりが、裏庭でぼくを出迎えた。ぼくの全身の傷を見とがめて、二巫女様が女の子たち



を厳しくしかった。

「これだけ傷だらけにしては、いかぬ。裸で山の中を引き回したようじゃが、毒虫の傷は何か月も残るぞ。お清めが済んでも帰してやれぬではないか」

ぼくは半分ほっとして、半分ぞっとした。安心したのは、十日間の神事が終わったら無事に帰してもらるらしいと改めて確信できたこと。おびえたのは、一か月かそこらで治る傷、つまりあちこちのすり傷も鞭で打たれた跡もおとがめ無しという事実だった。

「まだ陽は明るいが、明日からの荒事に備えて身体を休めておけ。それと、タカシ」

女の子たちも、この名前を口にしていた。七人が村の顔役か何かで、この人が代表者といったところかな。

二巫女様が、またぼくを不安にさせるようなことを言う。

「この子を裏庭につないだら、傷の手当てを男衆にさせてやりなさい。うんと良く効く傷薬を使って良いです」

裏庭につなぐってどういう意味かと思ったら、まるきりそういう意味だった。鉄の輪っかに結ばれていた縄がほどかれて、ずっと短い鎖に付け替えられた。それを、壁に沿って

植えられている松の木の根元に巻きつけて南京じょうをかけられた。立って歩けるのは一メートル半くらい。

女の子たちが「どの家にも入れてやらない」って言ってたのを思い出した。もしかすると、神事が始まるまで、鎖でつながれっぱなしにされるのかな。まるで犬みたいな扱いだ。いや、犬小屋すら無い。

傷の手当のほうも。三十分ほどすると、座敷には居なかった初対面の若い男の人が三人やって来て。ぼくの手を縛って松の枝から宙づりにして。全身に「よく効く傷薬」をぬりたくってくれた。

「痛い！ ひりひりする。やめて……許してください！」

悲鳴のあげっぱなし。全身に針を突き刺されてるみたいな激痛。アンモニアのにおいがきつい。これ、傷薬じゃなくて肩こりのぬり薬だ。アンモニアだから、毒虫にかまれた傷の特効薬にもなるのかな。

だけど、痛いだけじゃなかった。薬の正体とは関係の無い話だけど。絵筆くらいの刷毛で薬をぬりながら、やたらと身体を触るというよりもいじくる。縮かんでもC形のリングで皮を押し上げられてむき出しになってる亀

頭をくすぐったり。乳首を指の腹で転がしたり。アナルをくすぐられたときは（悪い意味で）鳥はだが立ったよ。

元々が女装をしてたし。この人たちに比べたら、ぼくはちっこくて可愛らしい（という自覚はある）から。リアル男の娘としてチカン行為をしてるんだらうか。

チカン行為くらいは我慢（出来なくても）するしかないのかもしれないけど。「良く効く傷薬」をチンチンとタマタマに、傷の部分よりもしつこくたっぷりとぬられたのは、ひどすぎるよ。ぬられた最初はスウスウして快感なんだけど。すぐに熱くなってきて、傷口よりもずっとしみる——のは、傷の手当てが終わって、松の枝からつるされたままで放置されてしばらく経ってからだった。

もう、裏庭にはだれも居なくなってた。

「薬がしみます。ふき取ってください。許してください。だれか……！」

助けを求めてもムダだろうと思いながら、でも悲鳴を押えられない。だんだん泣き声になってくる。

「ひどいよ……ぼくが、何をしたっていうんだよ。マラ神様なんて、知らないよ……」

これまではずっと付き添ってくれていた真

苑さんも姿を現わさない。

そのうち、泣きじゃくるのにもあきて。身体を動かすと手首に縄が食い込んで痛いだけだし。だらんとつるされたまま、ゆっくりと流れる時間に身をまかせるしかなかった。

日の入りの少し前に、大ばば様と真苑さんと、さっきの二人がお屋敷の裏口から姿を現わした。

やっと宙づりから下ろしてもらえたけど。太ももの付け根と足首を細い縄で左右別々に縛られた。直角以上にはのばせない。ひざ立ちにはできるけど苦しい。両手も五十センチくらい広げて手首を縛られて首に巻いた縄とながれた。やっぱり直角以上にはのばせない。「お清めが終わるまで、おまえは人間ではない。四つんばいがふさわしかろう」

これまで会った村の人たちで、だれがいちばん非情かというと、この大ばば様だと思う。そして、いちばん優しくしてくれる真苑さんが、四つんばいになったぼくの前に、木の板に乗せた晩御飯を置いてくれた。

和食というかそ食というか強精食というか。山芋のすりおろしに生卵。ニンニクを丸ごと焼いたのとか。オクラのおひたしみたいのと。

それと、貝がたっぷりはいった味そしる。そして、玄米ご飯がちょっぴり。どれも、浅いお皿に盛り付けられてる。おはしは付いてない。

四つんばいのまま犬食いしろってことだ。地面に座っても、手の動きを制限されてるからお皿に届かない。

「残さずにたべるのじゃぞ。あ、そうそう」

鉄クイの横にプラスチックの箱が置かれた。半分くらいまで砂が入ってる。

「これが、おまえの便所じゃからな」

砂箱。まるまる犬扱いだ。

大ばば様と男たちが立ち去っても、真苑さんは残った。ぼくの正面にしゃがみ込む。

「私は気にせずに食べなさい」

と、言われても。わざとなのか無意識なのか。足を開き気味にしてるから、目の高さに真苑さんの股間がある。ジーンズだから、微妙な曲線とかはちっとも分からないし。最初に会ったときにぼくは女装してたし。今は全裸だけど短小包径（自己けん悪）だし。しかも奇妙な輪っかですます縮められてるし。ぼくのことを男の子と思ってないのかな——なんて、さすがに自意識過小かな。

とにかく。食べろって言われたので食べ始

めた。言いつけられたことに逆らうとひどい目にあわされる。この半日で、それだけは学んだ。こういうのを奴隷根性っていうんだっけ。

それはともかく（じゃない！）。四つんばいのまま顔を皿に近づけて、ずぞぞーっと味そしるをすすったら。猛烈に空腹を意識した。考えてみたら、昼御飯を食べてなかった。

まるきりの犬食いじゃないよ。ご飯はとろろのお皿に混ぜて、両手でお皿を押えて食べたし、味そしるの貝は手でつまんで食べた。貝はともかく、お皿を前足で押さえるくらいは犬でもするかな。

犬だってもうちょっとはお行儀良く食べるんじゃないかなって反省したのは、すべてのお皿が空っぽになってから。全体に薄味だったけど、それがかえって食材のおいしさを引き出してた——なんてグルメぽく気取ったりするのは、真苑さんがずっと見てたから。そうでなかったら、底までぺろぺろなめてた。腹八分っていうけど、半分がいいところ。

ぼくが食べ終わったのを見届けてから。真苑さんが、ぼくの真横に位置を変えた。

「じっとしてるのよ」

そう言ってから——ぼくの股間に手を差し

入れた。

「あ……」

腰を引こうとしたら、もう一方の手で乳首をつままれた。

「動かないで。早く神事を終わらせて家に帰りたいんでしょ」

そのとおりでけど。それと、乳首をクリクリするのと何の関係があるんだよ。ぼくより背が高くせに、指は細くて柔らかい。乳首がくすぐったくて、甘い稲妻というか鋭いさざ波が胸を震わせる。

「そのためには精通しなくちゃね。精通してから九日間の修行を積んで、神事はそれからなんだから」

ママの話と違う。精通が無ければ、ずっとこんな扱いをされて——夏休みが終わっちゃう。

「だから、こうしてあげる」

うわわわわ、タマタマを握られた。んじゃなくて、もまれてる。

「マッサージをしたら、成長即進になるはずよ」

ああ、そうか。だから、食事もあんなだったんだ。ニンニクとかネバネバとか。

「痛い……」

もみ方じゃなくて。女の子に股間をいじられてるんだよ。起つきしなきゃ男じゃない。でも、チンチンには鉄の輪っかをはめられている。いちばん敏感なカリクビは、内側がデコボコしたリングで閉めつけられている。

「あらら。大きくなってきた。痛いよね」

くふっと、真苑さんが笑った。でも、同情もしてくれてるのかな。

「九九の代わりに、マラ神様のお話でもしてあげようか。それには、この村の由来から話さなくちゃね」

真苑さんは乳首から手を放して。そっちは、C形のリングで強制的にむき出しにされてる亀頭をくすぐりながら（ますます、輪っかもリングも食い込んでくる）、村の歴史について語り始めた。

どこまでが史実でどこからが伝説かは、今となっては知る人もいないけど。四百年以上も昔の戦国時代。やんごとなきおひめ様と、そのお付きの女官たちとが、戦火から逃れて隠れ住んで。戦を起こす男など無用。子作りのための種馬と外敵を防ぐ番犬がおれば良い。女官といえども、里人にとっては雲の上の天女も同然。ひと晩仲良くしてやれば、一年はこき使える。政治的駆け引きとかはあつたけ



れど、女だけの隠れ里が出来上がったという次第。

とはいっても、子供を産めば半分は男児。忌子いみこと呼ばれていたそうだ。真苑さんは警察官に、ぼくはイミコじゃないって説明してたけど。あれは、外部に向けてとりつくろっていたのかな。それはともかく(じゃないけど)。赤ちゃんを捨ててもだれかに拾われて育てば、将来に種馬の中にまぎれ込むかもしれない。そうなっては近親姦にもなりかねない。確実な対策は間引き。そして、もうひとつが、例は少ないけれど『お清め』。

ぼくが着けられているような鉄の輪っか(チンコジというそうだ)を物心つかないうちからはめられて——成長をさまたげられて、最後にはもげてしまう。以後は種馬でも番犬でもない労働力。お清めが済んでも忌子は忌子だから、清められた忌子つまりオキヨとして、村での生活は許されたけど、衣服の着用は許されず、人間の住まいにも立ち入れない。

もつとも、忌子の制度はあまりに残こくだから——というより、近年のジャーナリズムにかぎつけられたら村の存続にかかわるので、次第にかん和されてきた。明治時代の中ごろには、昔の年齢の数え方で元服直前の一年間

だけを『お清め』の期間として、終われば母子共に追放——というところまで『人道的』になっていた。一年間くらいじゃ、もげたりはしないそうだ。その代わり、チンチンがあるままでも清められた証が求められたそうだけど——それがどんな証だったのかは、真苑さんも知らないそうだ。

間引きも『お清め』も、半世紀くらい前には行なわれなくなった。出産前しん断で性別が判定できるようになったから、合法的に中絶すれば済む。生まれる前だって命だとは思うけど、自分の考えを追うゆとりなどなかった。ぼくの運命にかかわる話だし、気を散らしたら、チンチンが痛くなる。

そして、いよいよぼくの話。ママは、この村の女性としては「異端」だったらしい。お腹の中の赤ちゃんが男と分かってても、中絶はしなかった。ママの母親が、選挙で選ばれた村長さんとかじゃなくても実質的に村をまとめるオフクロ様だったから、判定結果をごまかすことも、生まれた子を女として届け出ること、簡単に出来た。

簡単でなかったのは、ぼくの性別をいつわり続けること。だから、股間のタックを——起きてから寝るまでずっと、ぼくにさせてい

たってわけ。それでも、狭い村の中では難しくなってきた。ぼくが四歳のときに駆け落ちした。父と母が我が子を連れて村から出て行くのを駆け落ちっていうのもおかしいけれど。二人は結婚してなくて、ぼくはママの私生児だったし、オフクロ様、つまり大ばば様と親子の縁を切るような形になったから、やっぱり駆け落ちだね。

外の世界へ逃れて。二人は正式に結婚したんだけど。ぼくの性別は変更してくれなかった。女兒といつわった理由が明るみに出たら、村に迷惑がかかると考えたんだろう——というのは、真苑さんの話を聞いてからの、ぼくの推測。

これが、良宮や後宮、せいぜい三宮家の出来事だったら、村から三人が消えて、それで一件落ち着いてたんだろうけど。よりによって一宮家。四百年昔のやんごとなきおひめ様の直系。娘が若いうちは巫女の束ね役である一巫女を務め、先代の一巫女はオフクロ様を継ぐという——法王と王様を兼務するような家柄。

これまでは二宮家の巫女が二巫女として束ね役を担ってきたけど。一宮家の長女、つまり真苑さんが巫女になろうとすると、ケガレ

が払われていないのが大問題になってくる。

そこで、ぼくが呼び寄せられた。そういう流れになっている。

「これまでだって、一生を一年に短縮してきたんだもの。十日に縮めてもいいかなってなったの。お清めの証の神事は、ちゃんとしなければならぬけど」

具体的にどういうことをするのかは、巫女様とオフクロ様しか知らないというけれど。ほんとは知ってるけど、教えたらぼくがびびると思って黙っている——そんなふうに関心されたい口ぶりだ。

「今日は女の子たちにひどいことをされたけど……修行とか神事というのは、もっとひどいことをされるんじゃないですか？」

今の扱いからも想像がつくから、カマをかけてみた。

「うーん。痛いしつらいし恥ずかしいけど、気持ち良いことも、たくさんあるよ」

あいまいな返事をして、真苑さんは立ち上がった。

「明日になれば分かることだから。今夜は、よく休んでおきなさい」

食器を載せた板を持ち上げると。

「あ、待ってよ……」

ぼくの声には振り返りもせず、真苑さんは逃げてしまった。

よく休めと言われても。地べたの上だよ。犬小屋も毛布も無しで、どうしろって言うんだよ。

——真苑さんと入れ替わるように、さっきの二人の男が一輪車を押してもどって来た。大きなふくろを四つも積んでる。

男たちは裏庭の真ん中に太い鉄のクイを打ち込んで、鎖をそっちへつなぎ替えた。そして、鎖が届かない二メートルほどを離して、ふくろに詰めていた中身を並べていった。緑色と茶色が混ざった松葉かな。それを幅十センチ高さ五センチほどに積み上げて。九十度の間かくで四か所に火を点けた。

燃え上がったりはしないで、もうもうと煙を上げてくすぶっている。

「カ取り線香の代わりだ。朝まで保つはずだが、足りないようだったら、自分で足せ」

持ってきた四つのふくろのうち三つは巨大カ取り線香にして、残るひとつはクイのそばに置いてくれた。

「こりゃ、たまらんな」

男たちはすたこら逃げ去ったけど。鎖でつながれてるぼくは逃げられない。けど、逃げ

たら——全身をカに刺されるんだろうな。こんな山奥だから、もっと恐い毒虫もいるだろう。虫に刺されて苦しむか、煙にいぶされて苦しむか。真苑さんの言ってた気持ち良いことなんか、どこにもないじゃないか。

——すっかり暗くなったけど。縛られてあちこち引き回されたり、たたかれたり、おぼれさせられたりで、疲れ果てていたけれど。それ以上に心を打ちのめされて、眠るどころじゃない。

少しでも煙から逃げていられるよう、地べたに腹ばいになって。そうしたらそうしたで、股間の輪っかの刺激を強く感じて。気色が悪い。でも、煙たいよりはまし。

うつぶせになって、不安の中でぼんやりとしてるうちに。真苑さんの正体が気になってきた。真苑さんも、ママの旧姓と同じ一宮。親せきかなとは思っていたけど。一宮ってのは昔のおひめ様の血筋で、この村に一軒しかないって、真苑さんは言ってた。ということは……ママのお姉さんか妹さんの娘だから、従姉じゃないか。でも、その人はもう亡くなってるのかな。そうじゃなきゃ、一巫女さんとかになってるはずだし。あれ？ でも、巫女さんって未婚どころか処女じゃないといけ

ないんじゃないなかったっけ。でも、それは一般の神社の『建前』だし。あの二巫女さんは、そんな年齢じゃないよね。

ごちゃごちゃぐるぐるしてきて。どうだっ  
ていいことだと、放り投げた。

ぼくはこれから、精通までこんなイジメだ  
か逆待だかを受けて。それからさらに九日間の  
修業とかをさせられて。二学期までには帰  
してもらえるんだろうか。そうだ。まだ宿題  
が残ってる——なんて、この非常事態にどう  
でもいいようなことが心配になってくる。

そんなことをぐるぐる考えてるうちに、い  
つの間にか眠り込んだみたいだけど。

「痛い……」

すぐにだか数時間後だかは分からないけど、  
チンチンの激痛で目を覚ました。ぼくは眠っ  
てるのに、チンチンのやつが勝手に起っ  
きしたんだ。C形のリングが、カリクビに  
食い込んでる。付け根の輪っかから突  
き出てるネジが、サオに突き刺さ  
ってる。

チンチンがすぐに縮かんだから、痛みは治  
まったけど。ぼくが眠るたびにチンチンが起  
つきするもんだから——夜が明けても、ぼく  
の頭はぼんやりしてた。

昨日からの、特に精神的な疲れが残ったま

ま、昨日の何倍もの地ごくが始まった。

### 3. 神前奉納

真夏でも、夜明け前はすずしい。というよりも、全裸だし地べたに寝転がってたから、身体が冷えている。冬に目覚めたときと同じ生理現象が差し迫っていた。なんて気取った言い方をせずにはぶっちゃけると——おしっこがしたい。

ぼくのトイレとされた砂箱は、鉄クイのすぐそばに置かれている。そこにおしっこをしたら証拠が残ってしまうけど、他のとこにしたのを見つかったら、言葉でしかられるだけでは済まないだろう。

仕方がないので、その前でひざ立ちになって——ダメだ。チンチンが折り曲げられてるし手が届かないから、おしっこを前へ飛ばせない。上体をうんと折り曲げれば届くけど、その前に転んでしまう。惨めな思いをかみしめながら四つんばいになって、砂箱をまたいだ。そして、おしっこをしようとしたのだけど……出ない！

タックをしてるときも、おしっこは難しい。



タマぶくろは全部を接着するんじゃないくて、  
下の方は二センチくらいすき間を残してる。  
起っきたときは、亀頭だけがここから顔を出す。  
おしっこをするときも、ここから流れ出る。  
でも、今と同じようにチンチンを折り曲げてるから、出が悪い。出ても、中の空間に貯まりながらちよろちよろ流れ出るから、慣れてしまえばそんな感じだとあきらめるけど、女の子と同じで紙でふかなくちゃならないけど。とにかく、出せるんだ。

でも今は。出したいのに、水道のじゃ口が閉まっているみたいな感じだった。深呼吸をして。目を閉じて。おしっこを出すことだけに意識を集中して。

あ……じわあっとホースに水が流れてくる感触。ちよろちよろじゃなくて、にじみ出るような感じ。だったのは数秒。すぐに、タックをしてるときよりも激しい勢いで出だした。「あっ……」

おしっこがタマタマに伝って、生温かくてくすぐったい。はああ——と、ため息が出るくらい気持ち良かったんだけど。出し終わってから途方に暮れた。紙でふくどころか、手でぬぐうこともできない。地面にこすりつけようかとも考えたけど、すり傷を増やすだけ

だし。自然に乾くのを待つことにした。でも、こんなことを繰り返してたら、おしっこのにおいが身体に染み込んじゃうよ。

裸でチンチンに変ちくりんな輪っかをはめられて、四つんばいにしかなれないように縛られてクイにつながれてることに比べたら、本当にささいなことだけど——ゆううつな気分になる。

山間の村だから、空が明るくなってから日の出までに時間がかかる。太陽が山の向こうから姿を現わす前に、昨日の三人のうちのひとりが、食事を運んできた。

目の前に置かれた木の板には、昨夜とあまり変わらない食事が並べられていた。山芋とニンニクと納豆と生卵と茶色っぽいご飯。五穀米とかいうやつかな。味そしるは具沢山。ただ、分量は少ない。不安で胸いっぱいだから、そんなに食欲はないけど。

ぼくが食べ終わるころに、もう一人やって来た。この人は最初に座敷で会った七人のひとり。今朝は大ばば様も巫女様も真苑さんも姿を見せない。

ぼくはチンチンの輪っかにつながれた鎖を外されて、四つんばいのままで、二人の男の人に前後をはさまれる形で、裏庭から外へ連

れ出された。

ひざ小僧がすりむけないように、ひざを浮かして四つ足で歩く。

村の真ん中を突っ切って、山へ向かうあたりから急に細くなってる道路には、人影があまり見えなかった。農村の朝は早いと思ってたけど、そうでもないのかな。ていうか。ここは農村なんだろうか。村のまわりは草地が多くて、その合間に水田がぽつぽつと、それぞれの家のまわりに家庭菜園を大きくしたくらいの畑があるきりだ。自給自足の分だけを作ってるんだとしたら、この村の産業は何なのだろう。なんて、今のぼくにはどうでもいいことだけど。

たまに行き会う人は、みんな女性。ぼくの顔をちょこっと見てすぐに視線を反らす。軽べつと敵意の交ざった目つきだった。

昨日は女の子たちに引き回された道をたどって、川べりに出た。

「おまえには、これから神前奉納をさせる。その為には、身体の内側から清めておかねばならん」

また川に沈められるのかと思ったら、そうじゃなかった。男の人が、持っていたビニールぶくろから小さな青い箱を幾つも取り出し

た。箱の中には、薄ピンク色のイチヂク形の容器が二つ入っている。つまり、イチヂクカンチョウ。

「あの……」

ウンチをしろというのなら、自分でします。なんて本心では思っていないし、言葉にするのが恥ずかしいし。言いよどんでいるうちに、身体を押さえつけられた。

「いやです。やめてください」

髪の毛をつかんでひざ立ちにされた。ひとりがぼくの正面に屈み込んで。

バチン！　バチン！

目の前で星が飛び交って、耳がキインと鳴るほどの往復ビンタ。

「一宮にゆかりの者であっても、忌子は忌子じゃ。人間に逆らうな」

また髪をつかまれて四つんばいにされたけど、今度は反発する気力も失せていた。

イチヂクカンチョウを立て続けに六つも注入された。それから、目の前に青いプラスチックの固まりを突き付けられた。キノコ形をしている。

「二十分間、我慢しろ。途中でもらしたら、子供たちがやった昨日のミソギ。あれと同じことを、百発食らわせてやるぞ」

無理だし、無茶だ——直感で分かった。もう、お腹の中が大あらしになってる。二十分どころか五分も我慢できっこない。それに百発のミソギだなんて。非力な女の子に十何発かたたかれただけで、あんなに痛かったんだ。オトナの男の人に百発もたたかれたら、良くて半殺しだよ。

許してくださいって言う前に、男の人が言葉が続ける。

「これをケツに突っ込んでおけば、三十分でも一時間でももらさずにいられる。突っ込んでほしいか？」

つまり、アナルにせんをしてしまおうってことだ。そりゃ、もらさずにいられるだろうけど……こんな太いきノコが、アナルに入るんだろうか。でも、アナルセックスするのが有るんだから。

「入れてください」

あまり考えずに返事をしてしまった。ていうか。いやだって言ったら気元を損ねて、もっとひどいことをされるんじゃないかって、そっちを恐れたんだ。

男の人が、くしゃくしゃっとぼくの頭をなでた。

「よしよし。昨日よりは、だいぶん素直にな

ったな」

男の人が、ぼくの後ろへまわった。もうひとりが、横から腰を抱えた。アナルに固い物が押しつけられて——痛いのと熱いのが、同時に襲ってきた。

「痛い痛い……無理！ やめてください！」

悲鳴は聞き届けてもらえない。

めりめりと音を立ててアナルが引きさかれていく。それでも、途中から少しだけ楽になった。キノコ形をした部分が入ってしまったんだ。

「はあああ……」

ほっとしたけど。本当の苦しみに襲われるのは、それからだった。

二人は川べりへ下りる土手の中腹に並んで座りこんで、ぼくをながめたり、何か話をしたり。ふつうだったらスマホをいじる場面だけど、圏外だからふた昔前くらいの光景になっちゃう。

ぼくは、たとえスマホが使えたって、それどころじゃない。お腹が苦しい。痛いんじゃない。ウンチをしたいのにトイレがふさがってるときの、あの苦しき。それを十倍して半分にしたような感じ。半分というのは——無理に括約筋を閉めなくてもいいから。ゆる

めても、もれる気配がない。それはそれで、つまり絶対に出せないってことだから——じきに、全身から脂汗が噴き出てくる。

「くううう……うううう……」

自然とうめき声もれる。

何か他のことを考えて気をまぎらわそうとするんだけど、何も考えられない。

ウンチを出したい出せない出したい出せない出したい出せない……

でも、うんといきんだら、せんを押し出せるんじゃないだろうか。でも、そんなことをしたら、ミソギ百発——だけじゃ済まなくなるかもしれない。

そうだ。ぼくは川原に転がっている石の大きなやつを探して、その上に体育座りをしてみた。せんをもっと押し込んだら、苦しいのがまぎれるかなと思ったんだけど。半分だけ成功かな。アナルをこねくられて、その痛み<sup>。</sup>に気を取られて、ウンチのことを十秒くらいは忘れていられた。

苦しいのと痛いのと。痛いほうが、まだましだ。石の上で腰をくねらせて、自分でアナルをいじめる。痛いけど、キノコのせんを突っ込まれたときとは比べものにならない。むしろ、痛気持ちい良いかもしれない。

だけど、そんなのでしのげたのは五分くらい。どうしようもなく、お腹が苦しくなって。川原に横倒しになってもだえ苦しむ。

「お願いです。ウンチさせて……死んじゃうよおお！」

訴えが通じたのか、ただ二十分が過ぎただけなのか。二人が土手を下りてきてくれた。二人は服を脱いで、パンツじゃなくて二人ともフレキシブル。ぼくを抱え上げた。そのまま川へ入って、ぼくを四つんばいにさせた。

アナルに突っ込まれてるせんをこねくられて。

ズボッと音を立てて引っこ抜かれた。

ぶじゃあああ、どぼっ、どぷん。カンチョウ液に混じって、昨日からのウンチも噴出した。

「はあああああ……」

すごい快感。

「もっといきめ。出し切るんだ」

何も考えず、言われた通りにする。

ぶちゅ、びちち……

裸を見られるより百倍も恥ずかしい——なんて考えられるようになったのは、どれだけいきんでも何も出なくなってからだった。

でも。恥ずかしいのも痛いのも、これで終



わりじゃなかった。コップ洗いみたいな柄の付いたスポンジを、アナルに突っ込まれたんだ。

「痛い、痛い……きひいいい」

悲鳴にはおかまいなしに、がしがしと腸の中をスポンジが往復する。スポンジを引き抜いて、茶色に汚れてるのを川の水で洗って。また突っ込む。スポンジが白くなるまで繰り返された。

終わって川べりへ引き上げられたときは、四つんばいでひざを浮かす気力もなくなった。赤ちゃんと同じにハイハイで——村の端まで連れもどされた。

昔ながらの土蔵の前。そこで、足を直角よりのばせなくされている縄だけをほどかれた。「ここにある米をマラ神様のお社まで運べ。本来は米俵だが、おまえには無理だろうから、こちらの箱でかんべんしてやる」

その箱というのが、縦横四十センチと六十センチ。深さも二十センチくらい。ちょうど米俵の半分、三十キログラムだそう。持ち上げられるかどうかあやしい。一輪車とか使えば楽に運べるけど、背負子しよいこで運ばなければならない。今はめったに見かけないけど、二宮金次郎の銅像で薪を背負ってるL字形や

つ。肩に背負う部分はランドセルみたいのじゃなくて、逆U字形のハンドルになってる。手を縛られたままでも背負えるし、ハンドルを握ればすこしは楽かもしれない。

三十キログラムの米箱をひとつずつ背負子に載せて、落ちないように縄で縛って、ホコラの前まで運んで、四十五個をピラミッド形に積み上げる。

「今日じゅうに奉納するんだぞ。終わるまで、飯も休息も無しだ」

ホコラまでは二百メートルちょっとかな。一往復で五百メートル。四十五往復だと二十二・五キロメートル。ふつうに歩いても五時間。荷物を背負ったら——夕方までかかる。なんとかなるかなと思ったら、つい皮肉が口をついて出た。

「歩いて運んでもいいんですね？」

「なにい？」

朝食を運んで来てくれたほうの人が気色ばんだ。やば。怒らせちゃった。

「四つ足で背中に載せて運びたいのか」

「ごめんなさい。そんなつもりじゃないんです」

「ふん」

許してもらえたと思ったら、そうじゃなか

った。足首に縄を巻かれて、歩幅を五十センチくらいに制限されてしまった。文句を言えば、もっと意地悪をされそうだから、ぼくは黙って仕事にとりかかった。

のだけど。思った以上に時間がかかるし重労働だ。手を自由には動かせないので、地面に立てた背負子に米箱を載せるのが難しい。立ったまま米箱を持ち上げようとする、腰に痛みが走る。しゃがんで上体を起こしたまま米箱を持って立ちあがって、その逆の動作で背負子に載せなければならない。動きを制限されている手で荷物を縛りつけるのもひと苦勞。背負子は五十センチくらいの高さの台の上に置いてあるけど、それを肩にかつぐには、やっぱりしゃがまないといけない。そこまでの作業で、もう全身が汗びっしょり。

歩き始めると、三十キログラム（プラス背負子の重さ）は、限界をこえていると分かった。ランドセルが教材の詰め込みで重すぎるって言うけど、あれってせいぜい五キログラムだ。その六倍以上！

歩けなくはないけど、二十キロメートル以上なんて無理。しかも、歩幅を制限されるのは、思った以上に厳しい罰だ。気をつけていないと、地面のデコボコに縄が引っかかっ

てつまずきそうになる。

それに、裸足だぞ。健康サンダルをはいて歩くより、ずっと痛い。

たった一往復でへとへとになったぼくを、二人がしかる。

「二十分もかかってどうする。夜中までかかっても終わらんぞ」

だよね。二十分の四十五回は十五時間だ。それまでに、疲れて動けなくなると思う。

二往復目に、真苑さんが様子を見に来てくれた。

「これは無茶ね。せめて、これを使いなさい」

ぼくを地べたに座らせて、ワラジをはかせてくれた。サンダルじゃなくて、民俗博物館とかでしか見かけないやつ。それが寸詰まりで、土踏まずからかかとまでは裸足。このほうが、足を踏ん張れるんだそうだ。

実際に歩いてみると、その効果が実感できた。重い荷物を背負って前かがみになってた姿勢が、自然と強正される。サンダルは足の裏ですべることがあるけど、それもない。

でも、そんな実際の効果よりも。真苑さんだけはぼくをかばってくれるんだと、それが一番うれしかった。

寸詰まりワラジをはいていると、十五分弱

で一往復できた。これなら、すっかり夜になるまでには終わるかもしれない。

それは、まったく休まず疲れもしなければという甘い計算だけど。現実には無理だろう。しかも、意地悪までされた。

真苑さんが様子を見てくれていたのは、二往復だけ。真苑さんが居なくなると。それまでは土蔵の外でぶらぶらしてた二人が、ぼくを追いかけてきた。

「おじょう様に甘やかされたからって、いい気になるんじゃないぞ」

バチン！

尻をたたかれた。あまりに鋭い痛みだったので思わず振り返ったら、二人はまだフンドシのままで——手にズボンのベルトを握っていた。まるきりの鞭だ。

バチン！

バチン！

ぼくが足を速めても鞭はやまない。十発もたたかれて、やっと途絶えたと思ったら。

「うわっ……?!」

前へつんのめった。両手をつこうとしたけど、動きが制限されている。べちゃっと地面にたたきつけられた。

「このバカ者。御神米をこぼしたりしたら、

ミソギだけじゃ済まんぞ」

「あ、はい。ごめんなさい……気をつけます」

「これも修行のうちだと思え」

何のことかすぐには分からなかったけど。

「うわっ……?!」

またすぐに転んで。今度は、地面を引きずっている縄を踏んづけられたのが分かった。

ひどいよ。何が何でも失敗をさせるつもりなんだ。百発のミソギをさせる気なんだ。それも、きっと……木の枝なんかじゃなくて、鞭くらいも威力のあるベルトでたたかれるんだろう。

どうせリンチだかイジメだか、そんな目にあわされるんなら、奉納の仕事（修行？）なんかやめてしまおうか。ちらっと考えたけど、やっぱり足を動かし続けた。ミソギよりも残こくな罰を与えられるに決まってる。

だから、足を止めずに進み続ける。縄を踏まれたらすぐ立ち止まれるように注意しながら。さいわいに、意地悪はそんなにしつこくは続かなかった。五回転ばされて、あまりにくやしくて、すり傷も痛かったし……

「ひどいよ……なぜ、こんな目にあわないといけないんですか？」

男の娘だって男の子なんだ。涙なんか見ら

れたくないのに。泣き声になっちゃう。そして、さすがに同情してくれたのかな。男の人たちは土蔵へ引き返して行った。ので、二十分以上かかったけど、御神米を奉納して、帰りは軽いから五分とかからなかった。

土蔵へもどったら、もう二人の姿は消えていた。でも米箱は消えていないから——仕事を続けるしかない。

やっと十箱を運び終えたときには、たぶん正午を回っていたんだらう。また、真苑さんが様子を見に来てくれた。おにぎりが三つと大きなヤカンと。食欲なんて無かったけど、ヤカンの水はうれしかった。スポーツドリンクでも麦茶でもない、ただの水だけど、ものすごく甘く感じた。そして、ひとつだけ食べたおにぎりはものすごく塩からくておいしかった。

「ええと……」

真苑さんは何か言いたそうにしてたけど。

「ごめんね。がんばってね」

意味不明な、たぶん本当に言いたかったこととは別の言葉を残して逃げてった。

真苑さんだけは、ぼくの味方だ。その思いにすがって、ぼくは米箱を運び続けた。背負子への積み降ろしはすっかり要領が分かって

きたし。今日じゅうと言ったって、日が暮れてからだって何時間もあるし。なんとかなるんじゃないかな——そんなふうに分をばげましてみたりもした。

単調な作業を続けていると、身体の動きと頭の働きとが別々になってくる。

ママもパパも、ぼくがこんな目にあわされると知ってたんじゃないかと思う。だから、出生届もいつわって、ごまかしきれなくなって村から逃げ出したんだ。なのに、なぜ、今ごろになって。そうか。これまでは一年間の『お清め』だったけど、十日間に短縮されたから、それくらいならと思ったのかな。村の人たちの協力が得られるなら、ウソの証言で固めて、ぼくの性別変更もしやすくなるのかもしれない。

それと。ママはやっぱり実家と完全には縁を切りたくないのかもしれない。真苑さんが一巫女とかになるには、忌子が身内に居るとまずい。真苑さんは、そんな話もしてたっけ。ぼくのケガレを落とす必要があるんだろう。

あ、それだ。だから、真苑さんは「ごめんね」って言ったんだ。ぼくに同情してくれてるんじゃないなくて、自分のためにぼくをぎせいにしてる、その負目だろう。



でも。黙っていれば、ぼくには分からなかった。打ち明けてくれたってことは、ただぼくを利用してただじゃないのかもしれない。

往路の十分間は、そんなふうにあれこれ考えていられるけれど。復路の五分ほどは、そうもいかない。とくに、橋を渡る前後。昭和レトロっぽい光景だけど、女の子たちが何人か川で遊んでいる。女の子ばかりだからだろうか。すっぽんぽんの子も多い。

目の保養どころじゃない。どろの固まりとかを投げつけてくるんだ。さすがに顔とかはねらってこない。というか、標的はチンチン。小石を入れたのなんかもあるから、当たるとけっこう痛い。のに、なぜかチンチンが起きしようとして——輪っかが食いこんできて、それも痛いのに。でも、輪っかをはめられて良かった。起きしたところを見られるのは、もっと恥ずかしい。からかわれるに決まっている。

後ろから投げつけてくる子もいて、こちらは頭とかにもぶつけるから、結局は全身どろまみれ。小石のせいであざもいくつか付けられた。

「そんな汚れた格好で奉納するなんて、マラ神様に失礼だよ。洗っていきなさい」

無視して土蔵へ向かおうとすると、追い打ち。

「オトナに言いつけるよっ」

仕方がないので、橋を渡ってから、女の子たちと距離を明けて川へ入った。

「ふわあ……」

声をもらしたくらいに、気持ち良い。直射日光と重労働で熱くなっていたはだが、すうっと冷える。髪の毛もどろだらけだから、頭まで水に浸かった。いつまでもこうしていたいけど、それだけ仕事が終わらなくなる。背負子だけ川べりへ置いて、もう一度全身を水に浸して。身体をうんと折れば手が届くから、水中で身を丸めてチンチンも洗った。

女の子たちは、すこし離れた所から見物してるだけ。手足の動きを制限されたぼくを恐がっているんじゃないだろう。勝手なことをしたら、巫女様にしかられるんだろう。ミソギのときも、やり過ぎだっけとしかられてたもんな。

でも、しかられるだけだよ。ぼくみたいにたたかれたりはしない。それとも、度が過ぎるとセッカンされるんだらうか。異世界同然の村の仕来りとかは、ぼくには分からない。

女の子たちにじゃまされるのも、五往復と

は続かなかつた。水遊びにも忌子イジメにもあきて、みんな居なくなつた。

あとは——くやしさと恥ずかしさと惨めさとかみしめながら、とにかく御神米を運び続けるだけ。

休息は無しつて言われてても。たまに、男の人たちが（今朝の二人だけでなく）見張に来るから、堂々とは休めないけど。御神米の積み降ろしでちょっと手を休めるとか、空荷の復路をゆっくり歩くとかで、適当に息は抜いてた。ので。日が暮れても十箱以上は残つてて、街路灯もない真っ暗な夜道を往復する破目になつた。

汗のにおいか体温かで虫がたかってくる。ので、往路でも背負子を外して川で水浴びをして虫を追い払うようにした。これは見つけたんだけど、事情を説明したら見逃してくれた。

「遅くなつて困るのは、おまえだからな」

その意味は、翌朝になつて分かる。

深夜。ようやく四十五箱の奉納を終えて。御屋敷の裏庭へ連れもどされて。すでに巨大カ取り線香の煙が空間に満ちている中で夕御飯というか夜食を食べさせられて、鉄クイにつながれて眠つた。全身にのしかかってくる

疲労のおかげで、チンチンが勝手に起っさすることもなく（しても気づかなかった？）朝まで眠れたんだけど。

食事を運んで来た男の人にけり起こされた。まったく人間扱いされないくやしきよりも、眠たいのが先に立つ。

「さっさと食え。今日は、奉納した御神米のテッセンじゃ」

何のことか分からなかったけど。また川へ連れて行かれて、カンチョウされてアナルにせんを詰められて二十分もだえ苦しんで、出した後はコップ洗いで腸の奥までこすられて。

昨日奉納した御神米を土蔵へもどせと言われた。ああ、そうか。テッセンというのは、テッ収とかセン別とかで――神様のお下がり頂くことなんだなと、言葉の意味は納得したけど。一日がかりの重労働の結果を、今度は一日がかりで無かったことにするんだと思うと、意気消沈してしまう。

でも、文句は言わなかった。眠たいし、筋肉痛は出てるし。でも、足を縄で縛られたりはしなかった。ので、日が暮れて一時間しないうちに、その日の作業は終わった。

ひょっとして、明日はまた奉納をさせられるんじゃないかと不安に思いながら、やっぱ

りどろのように眠って一日が終わった。

※続きは製品版でお楽しみください。

原 案：G i o様

著 者：濠門長恭

表紙絵：藤間慎三

発 行：SMX工房

ブログ：<https://goumonchoukyou.jp/>